

空色の乙女たち ~グレースケール・スカイ~

J・LAKOTA

序章「白い墓地」

1943年12月8日。

冬を迎えたブリタニアは一面の雪景色に染まる。

その中を駆ける一本の列車が向かい、今まさにたどり着こうとしていた終点は、ロンドン。すなわち、ブリタニアの首都である。

乗客はホームに降り、その中に、軽い荷物だけを背負った3人の少女の姿があった。

サトウルヌスの祭りまで2週間を切り、ロンドンの街中は、戦いによる傷を見せながらも、人々は活気に沸く。

そんな道を少女達は車に乗って越え、しばらくして、ある場所に辿り着いた。

「真っ白……」

少女の1人は目の前の光景を見てそう呟いた。

一面を雪に覆い尽くされたこの場所は、セノタフ——墓地である。

ここには、今も続くネウロイとの戦いで命を落とした人々が埋葬されている。

墓地の中央の大道を抜けた先には、少女3人を象った銅像が飾られた記念碑があった、そして……、

「ん……?」

記念碑の台座の手前。墓標の前に花を沿える1人の女性。近づく人の気配を察知し、振り向いた先にいた人物に、女性は驚いた。

「……スタニスワーナ・スカルスキー!」

女性は花束を携えた少女をフルネームで呼び、彼女に近寄り、握手をした。

「ツイプリフ大佐、お久しぶりです!」

「まさかここで再会するとはな」

「あの……スカルスキー大佐?」

「ああ、ごめんね。こちらはフローレシュカ・ツイプリフ大佐」

スタニスワーナは、長身で髪をポニーテールに結んだ釣り目の女性を、少女たちに紹介した。

厚手のコートの首元から、オストマルク空軍の旧式の制服に特徴的な襟が立っていた。

続いて、スタニスワーナは連れの2人を紹介した。

「この子はクレニス・デエルデイ曹長」

「よろしくお願ひします!」

スタニスワーナより小柄で幼い、茶髪の少女は元気良く答えた。

「それと、こちらはマンフレнда・ザメンセツクデーニツク大尉です」

「よ、よろしくお願ひします」

スタニスワーナと似た青銀色の髪の毛をポニーテールにした少女は、緊張気味に答えた。

スタニスワーナと少女達のコートの下には、それぞれ軍服が覗かせていた。

スタニスワーナとクレニスは、前掛けと繋がる襟が首元から出ていた。色は白地に端が黒い縁取り。

スタニスワーナのコートの下には、W字の前掛け。

クレニスにはベルトで固定するほどに長い前掛け。さらにその下には茶色とオレンジの中間色をした制

服が隠れている。

マンフレндаの場合は、黒い制服を着ていたが、

厚手のコートによってそれが完全に隠れていた。

「ということは、お前たちはオストマルク空軍第133航空団のウィツチだな?」

「そうだよ!」

「あ、はい……」

「……今日、君たちと出会えて良かった。第133航空団は君たちのために作った部隊だからな」

「え? それって、どういうことですか……?」

「実はな、あの航空団の創設には私とアローラ・ヴァサタク大佐、そして、トマシナ・ヴィビールが関わっていたのさ」

「「ええー!?!」」

「察するに、知りたい、つて顔をしているな?」

「ええ、聞いてもいいの!?!」

「是非お願ひします!」

「そうか」

すると、フローレシュカは、記念碑の台座の近くに座り、3人を手招きし、座らせた。

「……さて、どこから話すべきか」

「それなら……大佐はどうしてストライクウィツチに?」

「……そこからか。いいだろう。話を始めよう」